



第5章 緑の課題

第5章. 緑の課題

神戸における緑の課題を、第4章で示した緑の都市空間構成に基づき、「3つのゾーン別(みどり、まち、田園)」、及び「各ゾーンのつながり」、「協働と参画」に分けて整理します。

1. みどりのゾーン

(1) 自然災害の防止

六甲山麓の自然災害を防止するために100年以上前から再度山を中心に六甲山系の植林が始められました。その後数々の自然災害や戦争の混乱期を乗り越えてきた結果、今日の豊かな森林が形成されるまでになりました。しかし森林の質に着目すると、管理の不足によって荒廃した部分も見られ、民有地も含めて適正な森林の手入れが求められています。

また特に震災以降は、市街地に隣接した山麓斜面の緑を保全・育成する六甲山系グリーンベルト整備事業*を進めています。近年は、全国的に集中豪雨による自然災害の発生が多発しており、災害に強い森づくりがますます求められています。

(2) 自然環境への貢献

CO₂など温室効果ガスの増加による地球温暖化が世界的な規模で課題となっています。そのため、神戸においても低炭素社会の実現に向けた様々な取り組みが求められています。

また、生物種の減少や絶滅、外来種の侵入など、生物多様性の保全が世界的な課題となっています。六甲山系や帝釈・丹生山系などの緑は、大きな広がりをもつとともに多様性に富むことが特徴で、他の大都市と比べても多様な生物の生息環境を提供し、周辺都市を含めた広域の視点からも重要な一翼を担っています。

これからも先導的にこの豊かな緑を計画的に保全・育成し、次の世代に引き継いでいく必要があります。

(3) 継続した森林の管理・育成

防災面や環境面において一層効果を発揮するような健全な森林にしていくためには、間伐や下草刈りなどの管理活動を継続していく必要があります。六甲山緑化100周年を機に、六甲山の再度公園を拠点に森林の緑をより豊かに育てて未来に引き継ごうと、市民・企業・行政の協働と参画による「こうべ森の学校」事業を実施しています。

今後もこれらの活動を継続・発展させ、様々な活動主体が協力し、防災面や環境面において質の高い森へと育てていく必要があります。

(4) 六甲山の景観や森林レクリエーション機能の向上

六甲山は古くから、都市景観や「毎日登山*」に代表されるレクリエーションの場として、市民に日常的に親しまれてきました。

これからも、神戸市民の生活と密接に関わる山として、また内外からたくさんの方が訪れるような魅力的な山として、緑を適正に保全するとともに、各施設の魅力の向上を図っていく必要があります。

2. まちのゾーン

(1) 選ばれる都市「神戸」の形成

少子・超高齢化、産業の空洞化、人や情報などのグローバル化などにより、都市間競争の激化が予想される中、選ばれる都市であり続けるために、美しい神戸の自然環境やまちなみを将来にわたって守り育てていくとともに、神戸らしい魅力に磨きをかけ、より多くの人々が訪れたいと思えるようなまち、住む人が誇りに思えるまちを目指していくことが重要です。

神戸市では「デザイン都市・神戸*」を都市戦略として打ち出しており、シンボルとなる緑豊かな六甲の山並みや活力を生みだしてきた港、都心における東遊園地、花時計、フラワーロード、街路樹、郊外の田園、変化に富んだ明るく開放的なまちなみなど、他都市にはない多彩で洗練された魅力を活かしながら、デザインの視点で緑によるまちの魅力を上昇していく必要があります。

(2) オープンスペースの確保や防災機能の向上

阪神・淡路大震災の教訓を活かして、これまでに防災拠点となる公園や河川、街路沿いの緑化による防災緑地軸の整備など、緑の防災機能の充実に努めてきました。しかし、依然として避難場所や避難路等となるオープンスペースが不足している地区も残っています。

これからも引き続きオープンスペースの確保や既存施設も含めた防災機能の向上に取り組む必要があります。

(3) ヒートアイランド現象を緩和する取り組み

都市の中心部においては、緑地や水面の減少及び建築物・舗装面の増大、排熱などによりヒートアイランド現象の進行が目立っています。神戸においては、これまでは他の都市と比べて影響は少なかったものの、近年は真夏日や熱帯夜の日数が増加するなど、ヒートアイランド現象の影響が見られるようになっていきます。

そのため、まち中に六甲山や海からの涼しい風を呼び込むとともに、緑の蒸散作用*や緑陰効果などを活かして、神戸の夏を過ごしやすくするための取り組みが必要です。

(4) 身近な緑花の推進や、緑地の保全・活用による住環境の向上

地域が主体となって住み良い環境を形成するため、地域による身近な緑花やまち中に残された貴重な緑を保全・活用していくことが求められます。

また、人口減少によってまち中に増加することが予想される空き地や低・未利用地を、地域が主体となって有効に活用する仕組みが必要です。

（５）公園等の安全性・安心性の向上や利用促進

高度成長期以降、急速かつ大量に整備された公園等の多くが近年一気に更新時期を迎えようとしている中で、施設の計画的な保全・更新や長寿命化*、バリアフリー化*が喫緊の課題となっています。

また、防犯性の向上をはじめとする安全で安心な空間を形成していく必要があります。

さらに、生きがいや健康づくり、子育てしやすい環境づくりなどの場となるよう、多様な世代のニーズに合わせた公園施設の利用促進を進める必要があります。

（６）歴史性・文化性を活かした魅力の向上

美しい港を持つ神戸は、国際港都として、港とともに発展してきた都市です。これまでに、都心近くの海岸線には、ハーバーランドやメリケンパークに代表される都市型親水空間が設けられています。また、港からまちを眺めれば背後に横たわる緑豊かな六甲山の山並みなど、神戸のウォーターフロントのみが持つ貴重な環境資源があります。

今後、これらの資源を活かして、さらに多くの人々が訪れ、活気に満ち溢れるウォーターフロントにしていくために、オープンスペースの整備や魅力ある質の高い緑化を通して、回遊性の向上及び憩いや賑わいの空間を創出する必要があります。

（７）海域の自然環境の保全・育成

ポートアイランドや神戸空港島など埋立地周辺の人工海岸における環境創造型護岸*や、須磨・垂水などの自然海岸における藻場*・干潟等の保全によって、生物多様性の保全を図っていく必要があります。

（８）協働による海辺のオープンスペースの有効活用

港近くのオープンスペースでは、市民や企業との協働により、港の特徴を活かしたイベントなどを開催し、魅力ある空間にしていく必要があります。また、みなとのもり公園（神戸震災復興記念公園）では、市民と協働でつくり続けることで震災の経験と教訓を後世の人々に継承していくとともに、公園の有効利用を図っていく必要があります。

（９）海辺のレクリエーション機能の向上

神戸の海岸線の西側は須磨海岸やアジュール舞子に代表される海のレクリエーション空間となっています。今後も、海辺の自然環境を活かしたレクリエーション空間としての魅力を向上させ、利用を促進していく必要があります。

3. 田園のゾーン

(1) 生物多様性保全活動の場の提供

動植物をはじめ様々な生き物が多様に存在することにより、豊かな食やおいしい水、きれいな空気、美しい景観や歴史、文化などの様々な恩恵（サービス）が市民にもたらされており、緑はそれらを支える重要な基盤となっています。また、多様な生き物の生息・生育環境となっている田園や里山環境は、人の手が入ることによって支えられています。

そのため、より多くの市民が田園や里山の管理に関わることによって、生物多様性保全に対する意識向上を図るための場所づくりや仕組みづくりが必要です。

(2) 不耕作地*等の活用

農業従事者の高齢化や後継者不足等により、適正に管理されていない里山や不耕作地が増加しており、良好な田園環境を維持するための対策が必要です。

(3) 田園コミュニティ形成の拠点づくり

コミュニティの縮退や遊休農地の拡大など、農村地域における活力の低下が懸念されており、地域住民が主体となった里づくり活動を積極的に推進する必要があります。

そのために、農村と都市との交流や農村地域におけるコミュニティ活動の活性化のため、様々な交流やスポーツ・レクリエーションの拠点となる場の整備が必要です。

(4) 農村文化や田園景観の継承

神戸の西北神に広がる田園地帯の緑は都市に近接して立地し、また社寺林、地域のシンボルとなっている樹木などの緑は、神戸の歴史や文化を表すものとなっています。

そのため、地域に美しい景観や風格を与えているこれらの貴重な緑を次世代に継承していくために、適正に管理し、保全する必要があります。

4. みどり・まち・田園の各ゾーンのつながり

(1) 水と緑のネットワークの形成

神戸は六甲山系を中心とし、そこから川を経由して海につながり、その周囲にはまちや田園が広がるなど多様な自然環境を有しているところに特徴があります。防災や環境保全、多様な景観などの観点から、これらの個々の自然環境の質を向上させるだけでなく、市域を越えた緑のつながりに配慮し、それぞれが有機的につながり、水と緑のネットワークを形成する必要があります。

(2) 生物多様性の保全

地球上の種の絶滅スピードが加速している今、自然環境豊かな神戸においても、生き物の生息・生育環境の連続性の確保をはじめ、より広い観点から生物多様性の保全に取り組む必要があります。また神戸では、生活様式・産業構造など社会経済の変化に伴う、自然との関わりの縮小による里地里山の環境の質の変化への対応が必要です。

5. 協働と参画

(1) 緑による人と人とのつながりの形成

魅力と活力にあふれた地域社会の形成のためには、人と人とのつながりが重要ですが、世帯人員の減少・地域社会とのつながりの希薄化などが大きな課題となっています。

そこで例えば、公園の美化活動や花壇の世話など緑と関わる取り組みをきっかけに、ともに考え、ともに汗を流しながら、地域主体の緑花活動を通して地域コミュニティを形成・発展させることが必要です。

(2) 社会全体で緑を育む仕組みの形成

少子・超高齢化や地球環境問題の深刻化など、社会経済情勢が大きく変化する中、神戸の緑をとりまく環境も厳しさを増しています。緑を持続的に保全・育成するためには多くの人的、物的、資金的支援が必要ですが、まだまだ一部の市民や事業者等の関与にとどまっています。

そのため、各主体が役割や責任、恩恵を認識しつつ、社会全体で関わっていく仕組みづくりが必要です。

(3) 地域防災力の強化

阪神・淡路大震災からの時間の経過に伴い、経験や記憶の風化、万一の際の体制の構築に懸念がもたれています。緊急の際に力を発揮するためには、個人の防災意識を高めるとともに、地域コミュニティの形成や強化を図り、地域の対応力を高めることが必要です。

(4) 次世代を担う子どもや青少年の育成

今の子どもや青少年が置かれている状況として、家族形態の変化に加えて、日常生活の中で自然と接する機会が少なくなってきており、たくましく生きる力や人間関係を構築する力が減少していると言われています。

そのため、子どもや青少年が本来持っている行動力や豊かな創造力を発揮できるような活動の場や、人間関係・社会性を身につける居場所づくりが必要です。

(5) 緑の情報発信や環境学習

緑豊かな六甲の山々や穏やかな瀬戸内海をはじめとする神戸の恵まれた自然環境は、わたしたちの生活にはなくてはならない貴重な財産です。

これらを次世代に継承していくため、市民一人ひとりが緑のことを市民共有の資産として、よく学び、情報を発信・共有していくことが必要です。またそれを子どもたちに伝えていくことが必要です。